

# 美しい犬

林芙美子

青空文庫



遠いところから北風が吹きつけている。ひどい吹雪だ。湖はもうすっかり薄氷をはって、誰も舟に乗っているものがない。

ペットは湖畔に出て、さつきからほえたてていた。ペットはモオリスさんの捨犬で、いつも、モオリスさんの別荘のポーチで暮らしている。野尻湖畔のモオリスさんの別荘へ来た時は、ペットはまだ色つやのいい、たくましいからだつきをしていた。

モオリスさんは、戦争最中に、アメリカへ一家族でかえってしまった。ペットは柏原の荒物屋にお金をつけてもらわれて来たのだけれども一週間もすると、つながれた鎖をもぎはなして、ペットは野尻へ逃げていってしまった。それから、モオリスさんのおとなりになっていた白系露人のガブラシさんに、かわいがられて暮らしていたのだけれど終戦と同時に、ガブラシさんも一大家族で横濱へいってしまった。

ペットはガブラシさんにも別れて、食べものもなく、すっかり、昔の美しい毛なみをうしなつて、よろよろと野尻の湖畔を野良犬になって暮らしていた。

ペットはポインターの雑種で、茶色の大きい犬だった。好きな主人にはなれ、その次のガブラシさんにもはなれて、いままでのたのしい、きそくだった生活からはなれて、だん

だからだが弱くなっていった。

冬になると、モオリスさんは、東京の麻布の家で、ペットをストーヴのそばにおいてくれたものだけれど、そして、野尻でも、ガブラシさんは冬になると、いつもストーヴのそばにペットを寝かせてくれたけれども、終戦になって、ペットの好きな人がだれもいなくなってしまおうと、ペットははじめての冬を、ほんとに哀れなかつこうで暮らさなければならなかった。

疎開の人たちもまだ、あっちこっちの別荘に残ってはいたけれど、ペットを飼ってくれような、親切なひとは一人もいなかった。ペットは、時たま野尻の町をあるいて、家々の臺所口からのぞいて、何かたべものはないかと、そこにいる人々にあわれみのこもった眼を向けるのだったけれども、誰も、しっ、しっど叱るだけで、ペットに食べ物を与えるひとは一人もない。

それでも、ペットはどうにか、食物をあさって、その日その日を暮らしていた。

秋の終りごろ、野尻の別荘地に、みなれないジープが一臺来て、アメリカの兵隊さんが、湖畔で船を出して遊んでいた。ペットは、久しぶりに、モオリスさんによく似たひとめぐりあったような気がして、ジープのそばへ走っていった。ジープに残っていた兵隊さん

が、ペットを見ると口笛を吹いて、ビスケットを投げた。

ペットは、はげしいうれしきで、その兵隊さんの手へ飛びついていった。何年ぶりかで、ペットはおいしいビスケットをもらって、ちぎれるようにしつぽを振って、兵隊さんにじやれていた。

ペットはとてもうれしかった。

やがて、日暮れがた、ジープは、船あそびの兵隊さんをのせて町の方へ戻っていった。ペットはジープが見えなくなるまでそのあとを追って、走っていったけれども、とうとう、ジープを見失ってしまった。ペットは、また、モオリスさんのいない、ポーチにもどらなければならぬと思うと、さびしくてさびしくて悲しくなってきた。

いつの間にかまた冬がやって来て、夜分なんか、寒くて、ペットは、ポーチのごみくずのなかで何度となく眼が覺めた。それでもがまんして、ペットは毎日たべものをあさって暮らしていた。時々、ペットに食物をくれる本田さんというお医者さんも東京へ行ってしまった。寒くなると、疎開者のひとがほとんどいなくなつて、別荘地は荒れ果てたまま、まるで無人境みたいになつていった。

ペットは、くさった床板のはがれたところからもぐって、板の間へ出て、昔、モオリスさんがよく本を讀んでいた部屋へはいって、部屋のすみっこへ、もぐもぐとうずくまって寝るようになった。

ペットもこのごろは年をとって、歯が抜けるようになり、足もともふらふらして、この冬を満足にすごせるような元氣さがなくなっていた。

ペットは、なぜ、モオリスさんが自分を捨てていったのか少しもわけがわからない。――思い出はたのしくて、夏の夕方、ポーチの食卓で、ポオタプルにレコードをかけながらおいしい肉片をモオリスさんからほつてもらった記憶など、ペットは時々なつかしく思い出すのだった。

モオリスさんの奥さんは、朝は、オートミールに牛乳をかけて、犬小舎の前においてくれた。その犬小舎も、柏原へ運ばれて、いまはペットの住居はここにはないのだ。

野尻に雪が来て、湖がうすかわをかぶったように、少しずつ凍っていくと、ペットはさびしさで耐えられなくなつて、毎晩、湖畔に降りては、水に向かってほえたてていた。走ったりほえたりすると、すこしばかりからだ熱くなるから……。

時々、お天氣のいい日は、小鳥を追つて、それをペットは、モオリスさんの別荘に運ん

で、ぼりぼりと骨までかじって食べた。捨てられた赤さびた鐘詰の匂いをかぐと、モオリスさんの匂いがしてなつかしかった。

雪が深くなるにつれ、湖畔のぐるりは白いびようぶをたてかけたように、樹木も家も深い雪に埋もれてしまう。

今日も、夕方からはげしい吹雪で、じつとしてみると、ペットはからだじゅうが凍りそうなので、湖畔まで走っていき、凍った水の上を見て、ヴォウ、ヴォウ、ヴォウとほえたてていた。まわりはすっかりくらくらくなっているのに、雪はでんぷんをまきちらしたようにすさまじく吹きあれている。

ペットは朝から何も食べてはいなかった。晝ごろ、大久保村まで食物をあさってみたけれども、何も食べものがないので、いつものように野鼠を追ってみたけれど、雪が深いので野鼠も出てはいない。

湖畔に出て、しばらくほえたてていたペットは、急に後脚が痛くなって、がくと雪の上へたばってしまった。ペットは熱い牛乳をのみたいと思った。

ことしの冬は、どうして、こんなに人がいないのだろう、たまに、人のいる別荘をさがしてみても、その人達は、ペットを棒で追ったりしてよせつけてはくれない。

ペットは脚を引きずりながら、モオリスさんの別荘へもどって来て、また、床下から、いつものところへもぐっていった。

部屋の中はまつくらで、時々、こわれたガラス戸をゆすって、吹雪がはげしいきおいで、部屋の中へ吹きこんでいる。しばらくすると、ほのかな雪あかりで、暗い部屋のなかがおぼろ氣にみえて来る。

ペットは二階へ上つてみた。わらははみ出た広いベッドが窓ぎわにある。ペットは脚を引きずりながら、ベッドの下にもぐりこんでみた。

ペットは時々頭を窓邊に向けて、はげしい吹雪にほえたててみたけれども、窓を叩く雪まじりの風は少しも静まらない。

ペットは泣きたくなるほどさびしかった。

天井から、くもの巣だらけのカーテンのひもがぶらさがっている。ペットはしばらくそのひもをがりがりとかんでいた。

ひもをかんでいるうちに、ペットは氣が遠くなつていった。きれいなローソクの灯のよいうな五色の光の色が、ペットのはかない眼のさきにちらちらするような氣がしてきた。

部屋に吹きこむ吹雪は、いつの間にか、小さい蝶々のような天使の姿になって、ペット

のからだのまわりをぐるぐる手をつないでまわりはじめている。ペットはいい氣持だった。モオリスさんが、大きいパイプをくわえて、ピアノを弾いている姿やペットにジャンプを教えてくれた、かつと照りつける夏の日の思い出が、ペットの頭に浮かんで来た。

時々、神様のようなお聲で、

「ペット、眠っちゃいけないよ、元氣を出して、いまに春が来るまで、もうしばらくのがまんだよ。」

とっているようだ。

ペットはうとうといいい氣持になってきた。

春になって、アメリカから、モオリスさんは中尉さんで日本へ来た。近いうち、野尻へいくというたよりが、柏原の荒物屋さんをびつくりさせた。荒物屋のおかみさんは、掃除道具を持って、大きい息子と二人でモオリスさんの別荘へ来てみた。

鍵を開けて二階へ上つてみると、モオリスさんのベッドの下で、ペットがみるかげもなくやせさらばえて死んでいた。別にくさりもしないで、平和な寢姿で横になっていた。

ばけつをさげたおかみさんは、「まあ、ペットがこんなところにいるよ。」といって泣

き出してしまった。おかみさんは、主人の家を忘れないやさしいペットをみて、ほんとに、すまないことをしたと思った。

# 青空文庫情報

底本：「童話集 狐物語」 国立書院

1947（昭和22）年10月25日発行

入力：林 幸雄

校正：鈴木厚司

2005年5月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 美しい犬

林芙美子

2020年 7月17日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>